

平成15年4月27日（日）

第三一四回 史跡めぐり 資料

名園・三渓園とカレーミュージアム

◎第三回史跡めぐり 名園・三渓園とカレーミュージアム

○平成15年4月27日(日)午前9時 JR南越谷駅前集合

○コース 南越谷駅＝南浦和駅＝東京駅＝横浜駅＝関内駅：

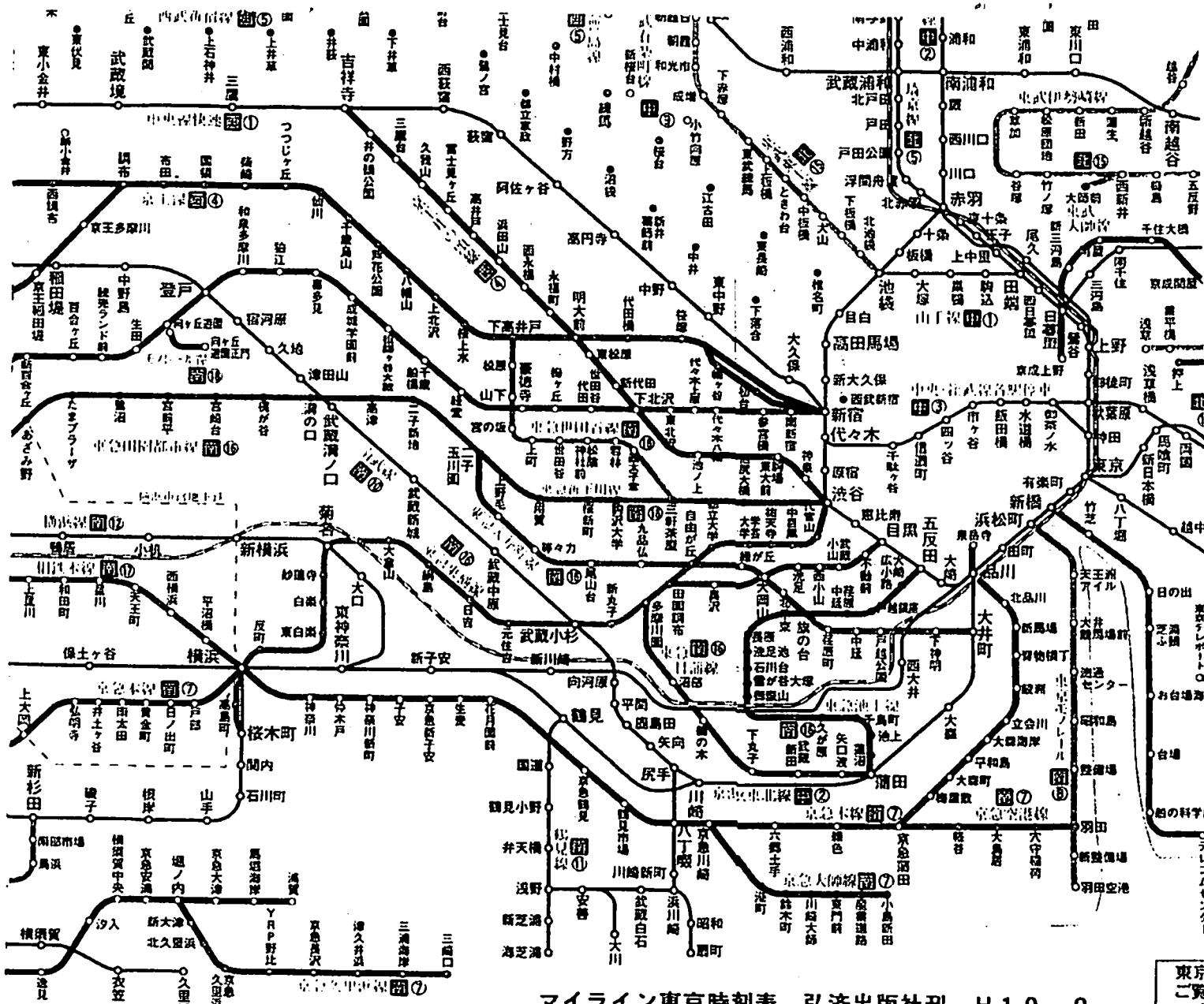
カレーミュージアム(昼食)：関内駅＝根岸駅＝横浜駅＝(バス)＝

三渓園(見学)＝(バス)＝根岸駅＝横浜駅＝東京駅＝南浦

和駅＝南越谷駅

(解散)

○参加費 四千円(交通費ほか) ○○案内 幹事長 宮川進



## 初代商法会議所会頭と

### 初代横浜市会議長になつた 原善三郎



文政十年（一八二七年）四月二十八日武藏国（埼玉県）児玉郡若泉村渡瀬に長男として生まれた。家業は農業を営むかたわら繭や生糸の取引も行っていた。彼が横浜に出ると店に大枚一千両を投じたということから彼の家の富有の度が計り知ることができる。

当時武州・上州は早くから養蚕・製糸が盛んで、桐生・伊勢崎・足利・秩父・八王子などの地元機業地へ生糸を出す外遠くは京都へも「登せ糸」と称して生糸を送るための市場が前橋・高崎・本庄・町田などに一定の日に定められた糸市が立っていた。ここは近在の百姓・商人・機業者間で生糸の売買が行われていた。善三郎もその一人であつた。

安政六年（一八五九年）の横浜開港後は、善三郎は地元の生糸を集めでは、横浜との間を往復して売りさばいた。

善三郎は幕末の社会状勢から横浜への開店を躊躇していたようであったが、安政六年（一八五九年）店舗を本町三丁目に設けたが、のち弁天通三丁目に移つて、商号を

亀屋と称して開業した。善三郎は前述のように資本金を所持して横浜に出てきたのであるが、その当時しばしば外國貿易に反対して、暴動を起こした浪士に襲撃されたことが数次に及んだということである。しかしその危難も漸く免れた。かくして彼は努力の末、慶應元年（一八六五年）には横浜第一の貿易商人になつていた。従つて明治新政府の時代にも、その方針が自ら合致するのであつた。

彼は明治二年（一八六九年）通商為替方となり、通商會社と為替會社とを設立し、その頭取になつた。また同年生糸改會社を設立して、その頭取にも推された。

この年には我が國日刊新聞の始まりである横浜毎日新聞の創刊に際し、他の数人とともに資金協力している。明治五年（一八七一年）京浜間の鉄道開通式に天皇陛下のご出席されたとき祝辭を述べる光榮に浴した。明治六年（一八七三年）には第二國立銀行を茂木惣兵衛などとともに創設して、頭取に推された。

なおこの頃から原合名の基盤づくりにつとめた。明治十三年（一八八〇年）四月十三日には横浜商法會議所が設立されたのであるが、これが創立にはその発起人は彼をはじめ小野光景・茂木惣兵衛・早矢仕有的等十六名の財界の重要な人であつた。そこで彼はこれが実現に努力した。その故を以てか彼は初代の会頭になつた。ちなみに明治二十八年（一八九五年）十二月十四日横浜商業會議所発足の時にも初代会長に推された。

彼は指導的立場からこれが実施に努力した。

当時横浜には輸出商品があふれ、所謂買手市場となり、輸出品の販売に消極的立場に在った。そこで輸出品を共同倉庫に集積しておいて、その販売を調制しようとするものであった。

明治十九年（一八八六年）には横浜蚕糸貿易商組合を設立して、その組合長になり、明治二十七年（一八九四年）三月二十日には横浜蚕糸外四品取引所が原善三郎・若尾幾造等実業家六〇名の発起によつて、設立され、原善三郎が理事長になつた。

右のように善三郎は実業界に大きな足跡を残しているが、同時に政治的にも大きな功績をあげている。即ち彼は明治二十二年（一八七九年）には初代横浜市議会議長に選任され、県会議員には既に明治十二年（一八七九年）の初度の選挙に当選してその足跡を残している。明治二十五年（一八九二年）には埼玉県より選出されて、衆議院議員となり、つづいて三期連続して衆議院の議席を占めた。また彼は明治三十年（一八九七年）六月には貴族院議員に選出された。その他彼は幾多公職に就いている。

彼は明治二十二年（一八八九年）、日清間に陥落になつて、折、海防費として、金二万円也を献納したことによつて、黄綬褒章を賜はり、正六位に叙せられた。明治三十二年（一八九九年）には病を得て、二月六日死去した。年七十三歳であつた特旨を以て位一級を進められ、従五位勲四等に叙せられた。

## 三溪園を公開した 原富太郎



明治元年（一八六八年）岐阜県羽島郡柳津町字宇佐波の青木久衛の長男として生まれた。青木家は名主であった。富太郎は長じて、大垣の野村藤蔵の鶴鳴塾や京都の草場船山について学んだが、更に明治二十一年（一八八八年）に東京に出て、東京専門学校（早稲田大学の前身）で学ぶ一方跡見女学校で助教として教壇に立った。

ここで横浜の実業家原善三郎の跡取りの孫娘屋寿（やす）を知り、恋愛の末、中島信行夫妻や校長跡見花渓の尽力によつて、原家に婿入りした。

明治三十二年（一八九九年）、先代原善三郎が没するや、個人経営の原商店を原合名会社として富太郎の社長で人員を淘汰するとともに人事を刷新して業務関係については売込部（生糸部）・輸出部・製糸部・地所部及び林業部の五部に分けて、それぞれ人材を配置し、強化した。殊にこの際目立つことは、单一の事業で無く、製糸工場を取り入れて、工業化をはかり、地所部及び山林部を設置して堅実化をはかったことは事業の多角化となつて、富太郎の新經營方式といえよう。また同年彼は海外市場の実地調査を行つて、明治三十二年（一八九九年）には店員を歐米調査に派遣し、且モ

スクワ・リヨン・ミラノ・ニューヨークなど各地に駐在員を置いた。

なおここに附記するが、工業化とは製糸工場の直営であつて従来から経営していた渡瀬工場以外に新たに四工場を増設した。その工場は明治三十五年（一九〇二年）三井から譲り受けていた四工場である。その工場は三井家が経営していた上州富岡・野州大崎・名古屋・三重四日市の四大製糸工場である。なおずっとおそくなつてすなわち昭和四年（一九二九年）子安製糸研究所を設立して自動操糸機の研究製作を行つた。

彼の最も大きな功績は何といつても、大正三年（一九一四年）の大恐慌の時である。第一次世界大戦の勃発したとき、生糸の価格が大暴落した。このとき原富太郎・小野光景及び茂木惣兵衛はその救済の立役者になつて、政府に運動して、多額の資金を借りて、帝国蚕糸会社を設立した。富太郎はそのとき社長となつて、活躍した。それがため生糸価を維持して、大成功をおさめた。株式市場は活況を呈した。その後の大正九年（一九二〇年）の大恐慌の時にも富太郎が先頭に立つて、これに対処したこと有名である。また大正九年（一九二〇年）には茂木合名の破綻に伴つて、七十四銀行・横浜貯蓄銀行は休業した。これによつて、原富太郎は右両社の整理を行つた。同年十二月十六日横浜興信銀行創立され、富太郎頭取となつた。これが今日の横浜銀行のはじまりである。大正十二年（一九二三年）の関東大震災は横浜を焼土と化した。こ

れによつて、横浜蚕糸貿易復興会や横浜市復興会が結成され、共に原富太郎がその会長となり、横浜市の復興のため懸命な努力をした。彼はまた社会福祉事業につくすことが大きく、神奈川県匡済会を設立し、死去するまでその会長となつた。

原富太郎について特筆すべきことは明治三十九年（一九〇六年）五月一日以来彼の庭園であった三溪園を一般に公開したことである。この園は富太郎自身が歴史的建造物を織りませて築造した獨得の庭園である。爾來昭和一十八年（一九五三年）八月十七日に財團法人三溪園保勝会が設立されて管理されるに至るまで四十数年間私園を開放していた。

また富太郎は古美術を好んだところから明治三十年（一八九七年）頃から古書画・古器具の蒐集をはじめ、この三溪園には幾多国宝や重要文化財がある。

殊に絵画については横浜出身で東京美術学校長となつた岡倉天心と親厚になつて、橋本雅邦門下の横山大観や下村觀山とも知つた、特に觀山は富太郎の援助で本牧の和田山に邸宅を構えて、生活上の心配までしてもらつた。また菱田春草・今村紫紅・小林古径・安田韌彦・前田青邨・荒井寛方・遠本御舟・佐藤玄々・小茂田青樹・牛田雞村など富太郎の厄介になつた仲間である。したがつてこれら画伯の書いた作も残つてゐる。彼も絵を嗜み三溪と号して彼自筆の絵もある。

彼は昭和十四年（一九三九年）八月十六日七十二歳で没した。生前從五位勲三等に叙せられ、瑞宝章を贈られた。

# 近代数寄者の庭

中村 昌生

京都工芸機械大学教授

原三溪の美術蒐集は多岐にわたつたが、とりわけ書画に名品が多く、有名な「孔雀明王像」は国宝に指定されている。そして蒐集はさらに古建築の領域にも及んでいた。離散、廃滅の危機に曝されていた名建築を買い求め、その保存に乗り出した。そのために横浜市の東南、本牧海岸に沿つた広さ約五万八千坪の地に大庭園を築いたのである。それは三つの渓谷に跨り、自然の起伏をそのまま組み入れての園池であった。明治三十九年（一九〇六）五月一日に開園された。彼がいかにこの庭の架造に精魂を傾けたかは「三溪」を自らの号としたことによく示されている。

この園内に古都から求めた古建築を移し建てた。それらの建築は仏塔、仏殿、廟屋、廊橋、樓閣、殿舎、茶室等、各種の建物が網羅され、それらが適地に配されて輪奐の美を競い、園池に映えている。正門からまず外苑に入る。苑路の右には蓮池が、左には中島のある池が広々と横たわり、前方に室町時代建立の旧燈明寺三重塔が望まれる。山上に建つこの塔は園内の隨所に景趣を添えている。その南方にはやはり室町時代の旧東慶寺仏殿があり、また付近に白川郷の旧矢筈原家住宅が移されている。内苑の御門を入れると、右手に白雲邸がある。大正九年（一九二〇）三溪の建てた豪華な住居で、なくなるまで夫人と起居した。石畳を進むと臨春閣の玄関である。紀州徳川家の別邸嚴出御殿

の遺構と推測される江戸時代初期数寄屋風書院の名作である。池に臨んで一屋・二屋・三屋と雁行状に連なる建物の景観は殊に優れている。対岸に大徳寺内天瑞寺に秀吉が母の長寿を祝つて建てた寿塔の覆屋がある。ここから西へ廊橋が架けられ、建物と池庭とのまことに巧妙な立体的構成を見せている。水面はここから流れとなり峡谷となつて奥へのびてゆく。そして佐久間将監作と伝える異色な二層の楼閣、聴秋閣が立ち、北側の流れを溯ると、伏見城中大名伺候の桂室であつたという月華殿がある。幽遠な一境である。

こうして大小さまざまな姿の建物が、ふさわしい環境に配置され、建物と風景とのみごとな融合によつて、この大庭園が構成されているのである。そして建物は重要文化財に指定されているもの十棟を数える。当園は古建築の一大聚落とも言える。このような文化財建造物を配した大規模な造園は例を見ない。

また三溪園は数寄者三溪の茶苑でもあつた。月華殿に付属していた茶室春草廬を聴秋閣の南方に移築したほか、蓮華院と金毛舎を自身で好み建て、雅客を招いて茶事を催した。谷川徹三博士は昭和十二年（一九三七）八月十九日早晩の茶会の模様を『茶の美学』の中で語つておられる。

蓮の花の見頃であるからというお招きなので、和辻哲郎さんと二人、前晩から三溪園内の西郷さんのお宅にとめてもらい、早朝四時に起きて西郷夫人、健一郎さん、和辻さんと四人で、丁度五時に園内蓮池の側までゆきました。三溪先生はもう迎えに見えていた。

この日は子息善一郎氏の追善の意をこめての茶で、月華殿のお斎には、溜塗の飯器に蓮の葉を敷き、その上に紅華の花弁數十をおき、その中に白飯が盛られていたという。

この蓮池は外苑の苑路の北側に沿つて毎年紅蓮の花が開く。今春完成した三溪記念館もこの蓮池を残して内苑の一角に建設された。

# 稀代の傑作庭園

白崎秀雄

## 傑出した意図と造形力

塔。

われわれ日本人に親しみ深い寺院の多層塔、中にも単純でさわやかな三重塔が、前方二百五十メートル、仰角十メートルの視界に、くつきりと建つ。たおやかに迫つ。

三溪園に第一步を踏み入れた者の目に、最初に映する情景が、丘の上の旧燈明寺三重塔である。やさしく、夢の中のもののように美しい。

佐佐木信綱

むらさきの海煙らひて丘への

塔の片面夕明りせり



原三溪筆「白蓮」



原三溪自画像

三溪園の入口とは反対側の海側から、塔を歌つたのではあろうが、塔の美しさを歌い上げた作にはちがいない。三重塔は三溪園の象徴であるとは、多くの人が語り、又は聞いた。わたしもそう思う。なお少し塔について續る。寺院の塔は、祇尊の墳墓として初め紀元前一、二世紀の印度に生れ、中国・朝鮮を経て七世紀の日本に伝



三溪園

わった。材質も金石土と種々あるが、日本の多層塔(七重・五重・三重塔)は木造がよく似合う。法隆寺、東大寺、薬師寺をはじめ、奈良、平安、鎌倉時代の国宝・重文の多層塔はいくつもある。

もとより、それぞれに莊嚴で美しい。三溪園の旧燈明寺三重塔は、室町中期の築造で、関東では最も古く、貴重で、重文にもなっている。

すべて和様を用い、各層の屋根の反りも唐様のように深すぎずおだやかで、釣り合いがよく、須弥壇、格狭間等は格別すぐれているといふ。塔身の高さは基壇から第三層まで二十四メートル弱、さらに、青銅製の相輪が、上へ七、八メートルつく。

画面ゆいが、拙著『三溪原富太郎』から引く。

三溪園の三重塔がわたしを、或ひは多くの人々を飽きさせないのは、塔自体の形姿もさることながら、置かれてゐる空間の比類のない適切さによつてである。

入口から数歩にしてひらける塔のヴィジョンは、他の風物を極度に排し、單純化して構成されてゐる。自然の再構成と整合とは、人工をまったく感じさせないことで統一されたといふべきかも知れない。造園家寺田小太郎は、塔の位置は「塔の内包する上長指向の特性を、全國の要の位置の台上突端に置いた絶妙のもの」といふ。

青年期の多くの歳月を三溪園に出入りした矢代幸雄は著書『藝術のパトロン』の中にかいた。

「私は今でも三の谷を憶い出す度に、真先に目に浮かぶのはこの三重の塔である」

今、この小文を草するに当つて、巍然とわたしが認識を新たにしたことがある。

三重塔が築かれている高さ約三十メートルほどの丘、ないし台地は、塔と別々のものではなく自体が三重塔の下部構造なのであつた。さよう、元来凹凸のあつた丘陵地帯で台地はあつたのであらうが、そこへさらに土盛りをし、或いは高すぎたのを削つて三重塔を据えるため適切な高さと、形とに造り直したのは、造園主原三溪その人でなければならなかつたのである。

木立ちを作り、入口あたりからは第一層が枝葉でほぼかくれるようになるとそのえたのも、彼自身だったにちがいない。

そう理解して来ると、もともと入口からすぐ右手の蓮池や、左手の大池の広さとのバランスのよさに感じ入っていたものが、一入適切に見えて来る。いや、蓮池や大池だけではない。右奥の内苑につらなる白雲邸から臨春閣その他と、背景をなす台地と木立ちの広さとの釣り合い、さらには三溪園全体の構成が、造園主の傑出した意図と造形力によって、造りなされていることが、肯けて来るような気がするのである。

### 三重塔について附記しよう。

塔はもと京都府相楽郡加茂村の燈明寺に在った。康正三年(一四五七)ころ建てられたと推せられる。

塔は、半ば朽ちかけたような状態で在つたものであろう。慎重に、慎重にと解体し、包装して運搬されたのにちがいない。塔の移築が成ったのは、大正三年(一九一四)であった。

塔の辺つ丘の麓を左へ折れ、池にかかる小さな橋を渡ると、本瓦の單層入母屋造りの庇の反りの姿もすぐれた古建築に行き着く。正面五間(約九メートル)、中の三間には棟唐戸、稀にみる秀逸な厨子の据えられた密教寺院、重文の旧燈明寺本堂である。

本来、同じ燈明寺の境内に並び存した本堂は、五年がかりて昭和六十二年(一九八七)に、移築されたものであった。三溪園の造園主の手はかかっていないが、遺志に沿おうとしたのである。

### 近代の三茶人

三溪園を造つたのは、三溪原富太郎(一八六八—一九三九)であった。

明治大正の日本を最も力強く支えた生糸の輸出業界の首位を占め、第一級の問屋、製糸業者をも兼ねた。近代の横浜を造つたのは原だ。今も横浜は原の考えたサイクルで動いているのだとの説をなす者さえいる。常に横浜の将来のためを思い、関東大震災の折をはじめ横浜に危急の及んだとき、敢然と私財を抛つてまで献身した。



旧燈明寺本堂

三井財閥の総帥鈍翁益田孝（一八四八—一九三八）に兄事し、互いに敬愛おなかつた。

（原は）美術はなかなか偉い。然し事菜に対しては美術以上にえらい。そのえらい事は到底書き盡せない。

益田は遺著『自叙益田孝翁伝』の中で、そのべてている。益田は同著の中で、井上馨や山縣有朋をはじめのべ数百人についてのべているが、中でも心から敬意を表した人物は原三溪以外にない。三溪は、益田よりも実に二十歳少かつた。

三溪は、益田と並ぶ古美術の大蒐集家であり、また岡倉天心率いる日本美術院の少壮画家たち、下村観山、横山大観、遠水御舟、小茂田青樹、前田青邨、小林古径、安田秋彦らの、大バトロンであった。彼らは月に六、七円で生活できる時代に、三溪から百円の援助を受けた、といわれる。三溪はまた、傑出した数寄茶人であった。わたしは、鈍翁と三溪、耳庵松永安左エ門（一八七五—一九七一）を以て、近代の三茶人とよぶ。

耳庵は鈍翁によつて茶道に導き入れられ、厚い尊敬を払つていたが、三溪への傾倒はまたかくべつて、「先生は徳川、明治の両時代を通じて光悦に比すべき大茶人であつた」とい、生涯を通じて三溪をよぶに「先生」を以てした。

原は、現在の岐阜県羽島郡柳津町大字佐波の天文年間以来の土豪、又は庄屋の青木家の十三代久衡と妻琴の間の長男として生れた。

明治十八年（一八八五）東京専門学校（早稲田大学の前身）に学び、遊蕩もしたが、跡見花蹊の許へ出入りする中、ふとした奇縁から跡見女学校の生徒であつた原やすと織り合ひ、花蹊の世話を明治二十四年原家の婿養子となる。

原家の主善三郎は、安政年間に埼玉県児玉郡渡瀬村から開港まもない横浜へ出て生糸商となり、「横浜はすべて亀善（原商店の屋号）のハラ」一つにて事決るなり」といわれる大富豪で、貴族院議員であった。娘と婿は早世し、直系は孫のやす一人しかいなかつた。当然、富太郎が跡を繼ぐ。彼は明治三十二年善三郎亡き後、前垂れがけ、大福銀式の経営を、近代的会社組織に一変し、事業を大發展させる。

富太郎は、急速に趣味も伸ばし、ひろげる。母方の祖父は高橋杏村という南画家であり、父久衡も竹林や庭い



林洞庵

じりに趣味があつたような事情にも由来していだであらう。

善三郎は、弁天通り三十日の本提の他、野毛山に別荘があつたが、横浜本牧三之谷に、六万坪弱の土地を購つて別荘を造り、首相伊藤博文が「松風閣」と名づけた。富太郎は夙くから、三之谷に生涯を送ろうと考えていたと見え、明治三十年すでに三渓つまり三つの谷と号した資料がある。

## 極楽浄土の実現

西に桂離宮、

東に三溪園

と、巷間にはいわれる。桂離宮は昭和八年(一九三三)ドイツの建築家ブルーノ・タウトが日本建築の粹と絶讃して以来、劇的に評価が高まつた。三溪園には同様の展開はなかつた。

京都から東の日本には、三溪園に比すべきものがないという実感は、昨今一般に定着してきたようである。

JR線の横浜駅や桜木町駅からは直通のバス「三溪園行」、山手駅で降りれば通称本牧通りを三キロ半ばかり南に歩くと、左に桜道という通りが丁字路をなす。名の如く桜並木の通りで、五、六百メートル進んだところに、木の門がある。

三溪園の入口である。

入つて数歩行くと、前方にひろがるのが、圓頭にのべた三重塔のヴィジョンである。

旧燈明寺本堂から、池を渡つた向うの谷間に、名高い駿込み寺東慶寺のお堂や、延光門院の侍女横田が寵を受けた斎藤時頼の後を追つて尼となつて住したといふ横笛庭などがある。

入口からこのあたりまで歩いてみると、わたしはいつも気付く。日曜などでかなり入園者が多いときでも、園内が静かなことである。誰でもがおだやかに歩を運び、あたりを眺めている。声高に喋る人も、騒がしく馳せ廻る子供もいない。

上に三重塔について主としてのべた。三溪園という外苑の一部で、原家の私庭たる内苑と区別され、草創期か



旧東慶寺仏殿

ら一般に公開された。というよりも原が三溪園を造ったのは元来市民への公開を念じてのことであつた。

三溪園の開苑は、明治二十九年（一九〇六）、私庭が完成して内苑とよんだのは大正元年（一九一二）以来であつた。

三溪園の土地は勿論自分の所有には相違ないが、明媚なる自然の風景は造物主の領域に属する。みだりに私有すべきではない。公開するのはむしろ当然の義務である。

三溪は、「横浜貿易新報」紙上でこうのべた。

三溪園造園の、稀有名点はまずここにある。季節と時刻とを問わず、「出入り自由の別天地」とあると、新間はかいている。

三溪園に入つて、三重塔をやや左に見ながら大池のわきを進むと、右手の蓮池と睡蓮池の先を右へ折れる道がある。古い大名屋敷のものらしい「御門」をくぐると、白壁の塀が続き、「白雲邸」と耳庵松永安左エ門筆の扁額があり、さらに行くと三棟の建物が相接する。建坪百五十二坪の臨春閣である。

旧天瑞寺寿塔覆堂、春草廬、聽秋閣以下いずれも重文指定の建物は、その奥にたなわる。すなわち内苑である。元来すぐれてはいるものの、廢棄寸前のような古建築物又は古材を集め、移送、修理し、地形自体をも造成して配置したのだった。

内苑の要、主建物が臨春閣である。

江戸初期、現在の和歌山市東部の川沿いに建てられた紀州徳川家の別荘で、巣出御殿とよばれた。大阪へ移築されたのを、三溪が買いつて運び、北に山を背負い、右に東京湾、左に大池を望む台地を、狙いすました

ように均らして基礎を打つ。南側の水田を掘り下げて池を穿ち、その前に臨春閣を構築した。

建築史家は、ひとしく最善の地点に建つてゐるというが、私見によれば三重塔の場合と同様、三溪はまさにそういう地点を自ら造つたのであつた。

桂離宮は、古書院、中書院以下一連の書院が雁行して中心をなし、月波樓や松琴亭を各所に配して、池と中島との均衡を保つ。建物と庭園とは、ほぼ等分に重きが置かれている。すなわち、三溪園の内苑ことに臨春閣は、

臨春閣外観



桂離宮に似ているのである。建築史家によれば、臨春閣はもとの嵩出御殿に大幅な改造を加えられた。三溪の創意によるが、まったく跡はとどめていない。

臨春閣は三層の各室とともに障壁画があり、その名を以てなににの間とよばれる。第二層の広縁はもと川にせり出して建てられ、釣糸を垂れて遊ぶ釣殿であった。

建築史家早川正夫はいう。臨春閣は三溪自身の生活への適応に多くの苦心が払われた。第三層の丸雨の間に座して窓外を見れば、正面には三重塔があり、右手に旧天瑞寺寿塔覆堂が見える。この眺めは、宴や観音よりは深い思索にこそふさわしい。

「俗ないい方をすれば、彼はここに極楽淨土を実現しようとしたのである」

### まさに茶境



旧天瑞寺寿塔覆堂

三溪は、臨春閣に一切電線を入れなかつた。矢代幸雄は三溪の長男で、芥川龍之介の友人善一郎と、男爵園琢磨の四女で、「花の如く美しい」桜枝子との婚礼披露が臨春閣で行われた憶い出を紹つてゐる。臨春閣が完成した大正六年（一九一七）十一月のことであつた。

披露宴はすべて燐燐の明りで行われた。客を案内したり膳を運んだりする女中は、すべて日本髪に結い、雪洞を手に、廊下を往き來した。披露宴は第二層の住之江の間で行われた。折柄全盛の清元の名手延寿太夫が、「青海波」を語つた。

ゆらめく雪洞の灯の明暗と、延寿太夫の美声の織りなす中、「お雛様のような新夫婦」の夢幻の宴を、矢代は懐旧の念にたえぬ筆致で綴つてゐる。

三溪園内苑には、重文指定の建築物だけで六件ある。すべてにわたつては、到底かき切れない。

旧天瑞寺寿塔覆堂のあたりから深まる木立の中を進むと、溪流が落ちて来て、上り坂の半ばに聽秋閣がある。二層の楼閣建築で、室内は書院風に造られ、窓を開けると秋は谷間に紅葉、前にせせらぎ。

金閣寺や銀閣寺、西本願寺内の飛雲閣など樓閣造りの名建築の中に置いても、洒落な意匠の上で、嶄然頭角を



聽松閣正面

抜く。

茶席のかたちをとる一階も柏皮葺の屋根も高欄もすべて対称をさけつゝ、視覚的にはみごとに平衡を保つて軽快、洒脱をきわめる。

元和九年（一六二三）徳川家光が、上洛の折の用に連てさせたもので、その後春日局に下賜、維新後は牛込の二條邸に移されていたのを、三溪がゆずり受けた。

もとより茶席でもなければ、住居でもない。ことさらにシンメトリーを破った亞曲の奇を表わし、茶趣味はたえながら、貧しげな草庵趣味ではさらにはない。蓋をつくし、「用」をはなれた遊び、或いは雅びの極致の遊宴といえよう。

彼が三溪園の内、蓮華院で初めて茶会を行つたのは、五十歳の大正六年であった。かねて益田鈍翁や高橋帝庵に促されたのことである。二疊台の小間に、火災に遭つた古寺の風情で藤原期木彫の不動明王を土間に安置した。

足利義詮の達磨像という珍幅を床にかけ、中立の客に席入りを報せるのには、いつもの鍵ではなく、寺院用の磬を用いる凝りようであつた。

明治二十八年（一八九五）に始つた鈍翁の御殿山本邸に於ける大師会に、三溪は明治三十九年からたびたび参加して茶席を担当している。

大正十二年（一九二三）四月二十一、二十二日の兩日には、大師会が三溪園で行われた。高橋帝庵はその「大正茶道記」に、大師会は無比の好全場を得たとして、「三溪大師会」と特に名づけて、詳述した。

「兩日の来会者は合せて六百余名、臨摹閣を全場本部とし、すべて十七の茶席が、各地の名だたる數寄者によつて担当され、天正の北野大茶湯も何のそのの盛筵であつたと、記す。大師会は、形式としては鈍翁が社交を旨として始めた暇かな大寄せの茶会である。

三溪が、三溪園で自ら好んで催したのは、広大な三溪園を踏えながらの極侘びの茶であった。耳庵松永安左エ門は、「三溪先生」の茶湯についてのべた中に、次のように記す。

昭和十一年（一九三六）五月末、耳庵はすぐれた庭師で茶人でもあつた丸岡耕輔を伴つて、三溪園を「探見」に出か

けた。自らの柳瀬山荘の造営の参考にしたいと考えたのであろう。三溪は兩人を案内しつつ、造園についてなにかと語りかけながら、山吹の茶屋で腰をかけ、「こゝで一服いたしましょ」

と、いつとは知らぬ間に用意されていたと見え、庭の一隅に蓋の湯が煮えている。黄瀬戸のみことな小鉢鉢を茶碗に見立てて、漫茶が供せられた。

松永が茶碗を受けて今しも口にしようとした刹那、どこからともなくゴオンとただ一声鐘の音が聞えた。鐘の山吹の花がホロホロと散る。

「まさに詩境、まさに仙境、まさに茶境であった」

松永は記す。鐘はおそらく、かねて用意の鐘楼からのさりげない合図だったであらう。人を使つての茶略にはちがいないが、松永たちにいささかの不自然さを感じさせなかつた。

「三溪先生の茶事は創造であつて模倣ではなかつた」と耳庵は評する。

### 一木一草、手づからえらぶ

通常茶湯では茶席があり、広間ないし書院があり、露地があり、一郭があつていふところの茶苑をなす。物理的にいうなら、茶苑は二百坪もあれば大きい方で、数十坪でも充分である。

三溪は、池もあり流れもある内苑外苑すべてで五万数千坪に、臨春閣をはじめ十棟ほどもの古建築を茶席や広間や書院としたのだった。

三溪は茶苑を単純に物理的に拡大したわけではない。茶苑の概念を、事实上変革したのである。かくては流儀茶道の区々たる茶礼とか点前が問題になる筈はない。

勿論、茶湯そのものを没却し去つて、それこそ無茶や茶番狂言をやってのけたわけではない。益田鈍翁は、「原は初風炉ても名残りの氣分を出すお茶だからな」



天授院



月観殿から金毛扇を見る



旧矢庭原家住宅

と評した。初風炉は五月、炉から替り立ての季節の茶事、名残りは十一月の風炉から炉に替るときの茶事を指す。原の茶事はいつも晩秋の侘びの気分を表わすというのである。四辺に銀杏の落葉が散り敷く遠翠院での茶事を最も好んだのも、同じ理由であろう。

三溪は、世にいう茶人などの足許にも及ばぬ茶湯の神髓に近づいていたのである。

松永耳庵が生涯、三溪の茶湯を鉢翁よりもさらによく置いて尊崇<sup>そんそう</sup>することがなかつた所以も、肯かれる。

わたしは前に、三溪園は造園者が一般市民への公開を念願して運営したことに対する特色があるとのべた。もう一つの特色は、三溪園は造園主三溪が古建築や石を諸方に探しもとめ、解体や運搬の作業にまで直接指挥し、どこにどう置くべきかを考え、土地を造成して造った庭園であった。日本の名庭園は、大きくは造園主自らの構想によって造られてはいるが、いろいろ細部にわたる設計や石組まで自ら当つたという例は、わたしの寡聞にしてきかぬところである。

つまり、造園主は庭園の設計家なり庭師なりに構想を伝え、ゆだねて、造るのを常とした。三溪園の場合には、もちろん個々の作業に庭師を使つてはいるが、庭師や築庭家に設計をゆだねたといふような部分はあるでなかつた。

それだけではない。

園内に植えられた木々は、すべて三溪がこれまで諸方を尋ね、えらんで移植し、丹精したものであつた。たとえば臨春閣の池の畔の松を見つけるだけでも、三年がかりだつたという。

まだある。三溪園をたびたび訪れる人は、園内に四季おりおり、絶えることなくさざないの植物、別して草花に心を慰められるのを知つてゐるであろう。

たとえば外苑を入つて右手の蓮池には十数種もの蓮が栽培され、大池のほとりには初秋オオケダテのみことな群落を見せ、茶店の奥には梅林が一、三月に咲きそろい、せせらぎの周辺には春、タチツボスミレ、トウバナ、キツネアザミが咲く。やがてギボシが花穂をつける。

内苑にはヤマユリ、ノコンギク、ワレモコウ、フタリシズカ、フツキソウ、さまざまのシダ類、あげてかぞえにたえないほどの、清楚な、或は可憐な草花や緑が、詩情をたたえ、眼をよろこばせる。

慶応 四	一八六八	八月、資本富太郎の三溪園(富太郎)、英透園草見郡下佐波村(現在の岐阜県羽島郡御器所町)に生まれる。
明治一〇	八七	この頃、原晉三郎、現在の三溪園の南端、東京湾を望む山上に山荘を建てる。伊藤博文が「松風閣」と命名。
一五	九二	一月、富太郎、原家と婿養子縁組をし、扇宮太郎となる。
一六	九三	富太郎、この頃から、古美術の蒐集をはじめめる。
一七	九四	この頃、富太郎がすでに「三溪」を号して、いたとの資料がある。
一九〇一	九九	二月、富太郎、晉三郎の死去により原家の家業を繼ぐ。この頃から、因む天心らとの交際がはじまる。
三九	一〇六	富太郎、三溪園内に原家本宅を築造し移り住む。旧天瑞寺寺塔頭(現在の外苑)、横田庵を築造する。
四〇	一〇七	旧東慶寺尼院を移築する。
四一	一〇八	二月、富太郎、梅林の移植を祝う宴を知人、友人を招き催す。
四四	一一一	一月、富太郎、この頃から、因む天心の要請で日本美術院の圖案を後援、横山大観らがたびたび三溪園を訪れる。
一四	一一四	三月、日燈院寺三重塔を移築する。鎌倉から天授院を移築する。
一七	一一七	五月、富太郎、自らの雅号をつけた三溪園を創設、市民に開放する。
一八	一二〇	月額料を移築する。金毛庵を移築する。
一九	一二一	富太郎、白石邸を築造。ここを現年の住まいとする。春草庵を移築する。
二一	一二二	聽秋閣を移築する。
二二	一二三	二月、「大歸全」茶会が三溪園で行われる。九月、関東大震災で園内に被災をうける。富太郎、震災後の損傷の復興に尽力する。
三〇	一二四	六月、富太郎、「三溪園集」第一編を自費出版する(昭和十一年に第二輯、第三輯を出版。富太郎没後、昭和十五年、第四輯を出版)。
一四	一二五	八月、富太郎没。(七十歳)
二〇	一二六	横浜大空襲により園内は多大な被害をうける。
四五	一二七	八月、財團法人三溪園は廃会設立。原家から庭園の大部分を譲り受け、庭園および建物の復旧工事に着手する。
二九	一二九	三月、外苑が第二次大戦後はじめて正式に開園する。
三三	一五九	五月、全体の復旧工事が一應完成。七月、内苑がはじめて一般に公開される。
三四	一六〇	花菖宿が明治神宮から移築される。
三五	一六一	六月、山矢尾原家住宅が移築される。
三九	一六二	松風閣(二代目)を移築する。
五七	一六三	聽秋閣前流れ上流の山中に道歩道を復元し公開する。
六二	一六四	三月、山燈明寺本堂を移築する。
八七	一六五	四月、三溪記念館が開館する。
平成 元	一六六	八月、資本富太郎の三溪園(富太郎)、英透園草見郡下佐波村(現在の岐阜県羽島郡御器所町)に生まれる。

若いころに三溪園に寄留して三溪に彼の娘と同様惹しまれた歌人河杉初子(本名はつ)は、いう。

それはもう、一本一草に至るまですべて、先生が手づからおえらびになりました。

三溪はまた、園内に滝やせせらぎを造った。大池へ住ぐために、東慶寺仏殿の南に滝があつて、いかにも自然の渓谷のように水は岩を打つて飛沫をあげ、淙々たる音を立てて流れる。聽秋閣の前にも渓流があり、上には幾ヶ所か滝をなして落ちている。

三溪園は水を配しても、人工をあらわさず、つとめて自然に造られている。たとえば外苑の大池など、自然の池そのまゝではないかと思われるほど素朴な景観をしていると、庭園史家もいう。そう、三溪園は池にかざらず古建築にしても、ひととひととにそんな風にしてあつたのではないかと思わせるように、自然なたたずまいの中にある。

明治時代を通じて、最大の権力者公爵山縣有朋元帥は、たいそう庭造りが好きで格山莊を初め幾つかの庭園を造営した。小田原の古稀庵も、七十の明治四十年(一九〇七)に造営し、隣の益田純翁別邸と共に山頂に水道を造つて水を引き、庭内で滝にして落すかたちにしたのが、自慢だった。

四十二歳の原は益田の引合せて初めて古稀庵を訪れ、滝の前に行き、山縣に感想をもとめられると、

「閣下、失礼でござりますが、この滝は滝になつて居りませんです」

と、いい放つた。益田は巨額をちぢみ上らせて色を失う。

「なに、滝になつていないと、」

と、山縣は尖つた額骨を一層尖らせて問い合わせ返す。



魏秋闇と流れの石組

「この滝の岩石の配置などはどうでもよろしつゝござりますが、肝腎の滝の流れのひびきに生命がございません。言葉で表すのは難しうございますから、どうか私の造りました三溪園の滝を一度ご覧いただきと存じます」謙虚な人柄を以つて知られる原ではあつたが、こと三溪園に関してはそう断言してはばかりぬ確信をもつてゐたのである。

先に純翁の評を引いた通り、三溪は非凡な画才と造形力の持ち主であつた。わたしは拙著『三溪原島太郎』に彼が傑出した芸術家であり、最大の作品は三溪園である旨を述べた。

まさしく、彼はあだかも画家が布帛に筆で絵を描き、陶芸家が輪錠を挽いて成形し、施釉するように、古建築や石や木や水を以て、三溪園という巨大な三次元の作品を造つたのである。

(作家)

日本の庭園美7 三溪園 岡本茂男著 集英社刊 89・8

◎関内とは一 安政5年、日米修好通商条約で横浜が開港すると決められた。当時、横浜にあつた内海を埋め立て、東側を外国人居留地、西側を日本人商業地とした。しかし、外国人殺傷事件が相次ぎ、幕府はこの地を隔離するため周囲に堀をめぐらせ、関門を設けた。その門の内側が関内と呼ばれるようになった。

関内・山下町(旧居留地) 街並復元図 岡義男著刊 95・4

## □三溪園

(中区本牧三之谷三九三)

三溪園は横浜市の東南部元本牧海岸に添い、その広さ十七ヘクタール、自然の山や谷をそのまま取込んだ庭園で、原家三代目故富太郎氏が精魂を傾けて造園し、その雅号三溪にちなんで名づけられ、明治三十九年五月一日に開園された。三溪翁が美術愛好家であったことは有名であるが、単なる骨董趣味ではなく、優秀な美術品の収集とともに、芸術家の育成にもつくされ、日本美術院の秀才たちに多くの授助を与えられ、今日の日本画壇に多大の影響をおよぼしたのであった。その収集されたものは国宝孔雀明王の仏画を始め名品の数も多いが、わけても関西や鎌倉より寺塔、殿舎、楼閣、茶席等の逸品を集め、これを庭園に配して建てられたさまは、蓋し一世の偉観であった。これら数多い建物のうち、昭和六年十二月十四日文部省告示によつて國宝の指定を受け、その後文化財保護法により昭和二十五年八月二十九日付をもつて重要文化財に指定された建物は七棟に及ぶ。しかし戦時中近くに高射砲陣地があつたため爆弾による多くの災害を受け、戦後の混乱にまた多くの被害をこうむるなど、その荒廃ぶりは目をそむけさせるものがあった。しかし原家当主良三郎氏はこれら重要文化財建造物を公共団体に寄贈を決意されたので、昭和二十八年八月十七日財團法人三溪園保勝会が

設立され、庭園の大部分を譲受けると共に、昭和二十九年三月より復旧の工事に着手し、多額の国費と、県及び市よりの補助金により約五年の日子を費して修理を完成し、漸く旧觀を呈するに至つたのである。

なお、昭和三十五年六月に天授院が重要文化財の指定を受け、又同年十一月には岐阜県より飛驒の民家重要文化財旧矢筈原家住宅の移築が成り、当園の重要な文化財建造物に異彩を添えることとなつた。

明治時代に横浜港輸出品の王座を占めた生糸によつて、富を築いたいわゆる横浜財閥の代表的貿易商の財力と教養をうかがう点でも、この施設は貴重な資料といえよう。

## □臨春閣（重要文化財）

この建物はもと豊臣秀吉の築く聚楽第北殿の別殿であつて、その洒落な意匠は茶聖千利久の工夫に成つたと伝えられ、文禄四年（一五九五）伏見城中に移築され、元和六年（一六二〇）伏見城取壊しの際に將軍秀忠はこれを紀州侯に賜い、侯はさらに寛永九年（一六三二）に泉州左海（堺）の長者飯野左太夫に与えてこれを大坂春日出新田にある飯野氏の別業に建てさせ、出府の際の宿泊の用に供されたという所伝をもつていた。その後百五十余年を経て清海氏の有に帰し、八州軒と称されていたが、明治三十九年原氏が譲受けられ、大正四年に工を起し、六年に移築が完了、改めて臨春閣と命名された。

しかしこのたびの修理工事にあたつて種々調査研究の結果、右の所伝には歴史的事実並びに建築様式などの上から多くの矛盾が含まれていることが判明し、これを信頼することができない。調査の結果から見ると、この建物はもと紀州徳川家の別邸の一である巖出御殿であつたと推定される。巖出御殿は和歌山市の東北三里、紀の川沿いに建てられた別邸で、慶安二年（一六四九）に創築され、宝暦十四年（一七六四）に取壊されるまで、藩公は江戸出府に際して常にここに宿泊され、八代将軍吉宗も幼時この御殿にて過されたところである。取壊し後のこと

は不明であるが、恐らく春日出新田に移築され、以後は所伝通りであろう。江戸初期の別荘建築としては有名な桂離宮があるが、それは宮家の別荘であり、これは御三家の別荘建築といふことになる。両者を比較して見るのも面白い。

臨春閣は第一屋、第二屋、第三屋からなっている。一屋と二屋の関係は創築当初のままであるが、三屋は当初、現在と異つて一屋の背後にあつた。二屋はもと紀の川にのり出して建てられていたと考えられる。

#### □旧天瑞寺寿塔覆堂（重要文化財）

寿塔とは長寿を祝つて、生存中に建てる墓のことである。豊臣秀吉はその母大政所が大患に罹つた時、その平癒を祈願するため京都大徳寺内に天瑞寺を建てたが、功験があつて平癒したことを探り、母の長寿を祝つて天正二十年（一五九二）寿塔を

たてた。この寿塔は現在大徳寺内の竜翔院内に今なお存しておる、墓誌に天瑞寺春巖宗桂寿塔と記されている。この建物は天瑞院寿塔と伝えられるが、実は天瑞寺の寿塔の覆堂であつたと推定される。

#### □月華殿（重要文化財）

この建物はもと伏見城中に建てられていた諸大名伺候の際の控室に当てられていた建物で、元和六年（一六二〇）伏見城取壊しに際して宇治の茶匠上林三入に賜り、後に上林家から黄檗宗の三室戸寺金蔵院に寄贈され、その客殿として使用されたが、荒廃が甚しかつたものを大正七年同建物に附屬していた九窓亭と共に奈良の骨董商柳生彦蔵氏を通じ原家に移築されたものと伝えられている。使用されている古材から判定すると、この所伝に大きな誤りはなく、伏見城に使用されていた古材が混入していると認めてよいが、ただこの伏見城とは普通に考えられている豊臣秀吉の伏見城ではなく、家康の造つた伏見城である。

#### □天授院（重要文化財）

天授院は、建長寺の近くにあつた心平寺という廃寺跡にあつた地蔵堂を移したものである。形式手法から見ると室町時代末期のものと思われる唐様建築で、昭和三十五年六月重要文化財の指定を受けた。

## □ 聰秋閣（重要文化財）

聰秋閣は極めて洒脱な二重の楼閣建築である。この建物は元和九年（一六二三）三代将軍徳川家光が上洛した際に、佐久間將監に命じて京都二条城内に造営させ、当時は三笠閣と称したと伝えられる。その後これを乳母春日局に賜り、局はそれを夫の稻葉侯の江戸邸内に移したのであつたが、明治十四年（一八八一）には更に牛込若松町の二条公邸に移建、大正十一年原氏のもとに贈られるや三溪園に移し今日に至っている。二条城内の当初の位置は判明しないが、庭園建築として建てられたものであろう。類例の極めて少ない重要な遺構である。

## □ 春草廬（重要文化財）

春草廬は三疊台目の茶室で、月華殿と共に宇治の金蔵院につたが、当時は九窓亭と呼ばれていた。織田有楽斎の造るところと伝えられているが確証はない。有楽斎の没年は元和七年（一六二一）であるので、有楽斎とすればそれ以前の作といえる。春草廬は原家に来てからの名であるが、この名は臨春閣が八州軒と呼ばれて大坂春日出にあつた当時、その庭にあつた茶亭の名称で、臨春閣と共に原家に来たが現在は国立博物館所属の柳瀬山荘にある。従つて現在春草廬は二ヶ所にあるが、これは九窓亭と呼ぶべきであろう。

## □ 旧燈明寺三重塔（重要文化財）

三溪園のシンボルのように中央の山上に建つ三重塔は、もと京都府相楽郡加茂村燈明寺にあつたものを、大正三年三月に三溪園に移築したものである。関東としては最古に属する室町時

代の塔である。

## □ 旧東慶寺仏殿（重要文化財）

山にはさまれた谷間の奥に建つ仏殿は、もと鎌倉市山之内松岡の東慶寺内にあつた仏殿を、明治四十年に三溪園内に移築したものである。当初の入母屋造の屋根を寄棟造に改めたので、多少形を損しているが、唐様の禪宗仏殿の特色をよく保持している。

## □ 旧矢筈原家住宅（重要文化財）

この大きな入母屋合掌造りの建物は岐阜県大野郡莊川村岩瀬（白川郷）にあつたが御母衣ダム建設によつて湖底に沈む運命となつたので矢筈原昱氏から横浜三溪園に寄贈され、昭和三十年十一月移築したものである。

今から一一〇年前宝暦年間（一七五〇年頃）飛騨三長者の一人岩瀬佐助の家として飛騨高山の大工によつて建てられたと伝えられている。この地方の俗謡に“宮で角助、平湯で与茂作（よもさ）岩瀬佐助のまねならぬ”。普通の農民はまねができるないとその建物の豪華さをうたつている。

## □ 松風閣

松風閣は、明治二十年頃原家初代善三郎氏が建て、伊藤博文が命名した建物である。インドの詩聖タゴールが来日した際にもここに滞在するなど由緒ある建物であつたが、第二次世界大戦で全壊した。現在の建物は、昭和三十九年に再建されたもので一階は、原三溪翁の遺墨や美術品の陳列室、二階は展望台になつてゐる。（財団法人三溪園保勝会発行「三溪園」による）

四季の雅と歴史の趣に出会う。  
風光明媚をかたどる庭園、三溪園。

横浜の数ある名所の中でも、美しい自然の起伏をそのまま活かした三溪園。

明治三十九年五月一日に開園されました。

日本美術院の才能ある多くの芸術家の援助・育成に力を注ぎ

国宝孔雀明王(くじやくみょうおう)像の仏画をはじめとする

古美術のコレクションは、かくで国内有数を誇り矣した。

一般に公開した」とは、まさに希有の事

今でも四季折々の彩りに満ちた姿を  
描き続けています。

